全てのセックスの快楽を感じ尽くした私

セックス・・・・・・・・・・・。

泣かないでおこうと私は誓っていた。

悲しみなど幻想にすぎない。現実は厳しいから、泣いてなどいられない。

仕事に精を出す今だって。涙なんて、隠すのが普通なのだ。

だけどとめどなく溢れてくる。

これは愛だろうか。愛しさのあまりの悲しみなのだろうか？

セックスってなんだろう？？

愛は全てを変貌させてしまう。

窓の向こうの空が滲んで見えなくなる。

セックスとは一体何なのだろう？

分からない。分からないけれど、今日も彼と裸で子供になれる。

その事実だけは不変なのだ。

変わらない。会える。

今日も私は彼の裸に会えるのだ。

出会ったのは花屋さんだった。

夏近くにしては少し涼しい晴れた午後だった。

その日が休日だった私は、近くの公園まで気晴らしに歩きに行こうと、スマートフォンのウォーキングアプリを片手に春の穏やかな景色に目をやりながら爽やかな心持ちで歩いていた。

すると大通りの道路向かいの商店街に、小さくて可愛い花屋さんを見つけた。

しばらく花を眺めていると、小さなトラックが一台止まり店内へ入ってきた。

「あっ、お疲れさま。いつもご苦労さまです」

店主のおじさんが、荷物を持ってきた若いお兄さんに声をかける。

「お世話になっております」

軽く会釈をし、大きな段ボールを店内の奥へ運ぶ彼。

商品の花の補充だとすぐに分かった。

「こんにちは、、、」

気分が良かった私は、赤の他人に何の気なしに挨拶をする。

「あっ、こんにちは！お世話になっております」

清々しい笑顔を見せ、お兄さんは私にも軽い会釈をした。

だけど・・・・・・・

私の不気味なくらいに膨らんだブラウスの胸元を、彼は爽やかで穏やかな目ではっきりと見つめていた。

ゴクリ・・・・・・・・・・。

私は唾を飲みこんだ。

いつも思う。温泉なんかへいくと特に思う。

女性のここはどうしてこんなに膨らみを帯びているのか。

胸の谷間のことだ。

そしてどうしてここは男性と違って、何もついていないのだろう？

オマンコのことだ。

どうして毛を剃ったりして興奮するのだろう？

どうしておっぱいはこんなにも大きくて、先っぽに妙なピンク色をした突起物がついているのだろう？

どうして男の人はここを無我夢中で吸うのだろう？

そもそもどうして男と女に分かれているのだろう？

男はどうしてここを無我夢中で無我夢中で、これほどまでかというほどに無

我夢中で吸うのだろう？？

　股を広げたらどうなるの・・・・・・？？

　私はその花屋さんで小さな黄色い一輪花を購入した後、店の前の商店街の歩道脇でお兄さんと丁度一緒になったので少し会話をした。

「黄色い花っていいですよね」

　温和な笑みを浮かべる彼。

「お兄さんも、お花が好きなんですか？」

　私の右手中指は、唇に移動していた。

「この仕事をしはじめて興味を持ちました」

　優しそうな笑顔。私は太ももを少しだけ交差させた。

清々しさを際立てる午後の日差しは、私たちを妙な雰囲気に溶かしていった・・・・・・。

「・・・・・・・・んじゅっ・・・・・・・んじゅぷぅ・・・」

裸になった二人の全身にはうっすらと汗が滲む。

私たちはシックスナインで互いの秘部を一心不乱に舐め合っていた。

「んじゅぷぅ・・・・・・ぷじゅるるるぷぷぅ・・・・・・」

美味しいなんて通り越している。遥か昔に通り越している。

彼の長く太いペニスは、まるで生き物のようにビクンビクンと私の口の中で跳ね回り、飛び回っていた。

グルグルぐるんぐるんと回り、カウパー腺液の白い濁りが噴水のようにビュッ！！ビュッ！！と噴射し続ける。

我を忘れて舐めて舐めて舐めまくった。

とにかく全てが愛おしい。私は狂ったようにパカッと足を広げ、私の割れ目

からも同じように噴水が噴き出す。

　びゅっ！！！びゅびゅーーーーーーーーーーーーーーーーーーっっ！！！！

　あとは・・・・・・・・・・・・・。

　ひたすらピストン！！

　ピストンし続け、こすれ合うポンプのように、注射器のプラスチック容器がシュコシュコとこすれ合うように、肉と肉がこすれ合いずちゅずちゅと音を立てて粘液に絡まる。

　「セックス！！セックスなの！！！これがセックスだわ！！絶対そうなの！！！」

　「凄すぎる！！セックスってやっぱりすごいよ！！セックスセックス！！」

遊び合う二人。

そのあともう一度シックスナイン。それはもう２時間以上も続いた。

「もういいんじゃない？？シックスナイン・・・・」

「まだまだぁ！！！あと３時間はしようよ！！」

「いいかもいいかも！！息が出来なくなるくらい二人で舐め合おっっ！！」

舐め合うって凄い。

だって肉なんだもの。

「美味しい・・・・・・・・ぺろぺろ貝殻みたい。ぺろぺろしてるよ」

「二人して・・・・・・・・ね！！ぺろぺろしあい合戦！！へへっ！！」

「いいかもいいかも！！絶対これ！！これだよね！！」

静かな住宅街の片隅。

「生きてるって感じ！！！絶対これが生きてるってことだよ！！」

「シックスナインは絶対生きてる。だよね。ぺろぺろ楽しい！！」

「楽しすぎてたまんないよ！！！！！！！！！」

夏はもうそこまで来ている。

一心不乱に欲望を解放する私たち。

商店街の片隅、花屋の前で出会ってから時間にして５時間も経ってはいなかった・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・男女の出会いというものはどうしてこれほどまでに突如であり、

・・・・・・・・・・・解きほぐせぬ不可解なものなのだろう？

だけど。

今ではみ～んな、凄いプレイが当たり前なんだって。

どこでもかしこでも、男と女であればやることはやっているのだ。

私は言葉ではとても言い表せないほどの身もだえる快楽の中、ひたすらうめき声をあげてきた。

凄すぎるよぉセックスって！！！！

それから、私たちは頻繁に会うようになった。

連絡を取り合い、仕事や用事の合間を縫って。

腕を組み歩く私たちの脳内にはセックスのことしかなく、街で歩き愛を強く感じるたびに立ち止まった。

雨の日も嵐の日も。

道中で見つけた小さな小屋に忍び込み、私たちは汗まみれになった。

「んっ！！んんっ！！んんんっっっ！！！！」

肌と肌とが激しくぶつかり、生きている音がした。

互いの汗を舐めとり合い、動物になりきった。

小さな小屋は、公園のすぐそばにあった。

すぐそばでは老若男女、閑静な街並み。

爽やかで穏やかな午後の時間が流れているその少し離れた場所で。

まるで別の時間が流れていた。

・・・・・・・・・この世界は本当に同じなのだろうか？？？

お猿さんのようにファックし合いながら、私たちは妙に隔離された平穏な世界を哀愁するのだった。

「サトシィィッ！！！オチンポでかいよぉっっ！！！」

衣服を脱ぎ捨てた子供の私たちは、お互いに狂暴だった。

だけど純粋で。

私の貝殻の割れ目から噴水のように水しぶきがあふれ出る。

一滴残らず彼は舐めとる。

互いをひたすら舐める。

――――― 体験版はここまでです。―――――――――――――――――――――